

おおいた

AQUA NEWS

NO.42

2016.1

アクア・ニュース



表紙写真：番匠川河口域での二枚貝調査

目次

◎新年のあいさつ(末吉浅海・内水面グループ長).....	2
◎各担当、チームのトピックス	
・ワムシ培養技術研修を受講してきました(栽培資源チーム).....	3
・カレニア赤潮からアワビを救うために(養殖環境チーム).....	4
・ヒジキ資源の増殖を目指して ~ヒジキ母藻の移植によってヒジキは どの範囲まで着生するか~(浅海チーム).....	6
・かぼすドジョウ誕生間近！(内水面チーム).....	8
◎浜からのたより	
・国東半島のカキ養殖に注目！！ -「くにさきOYSTER」初出荷式-(東部振興局).....	9
・お見合い大作戦 in かまえ(南部振興局).....	11
◎人権コーナー.....	13

新年のあいさつ

農林水産研究指導センター水産研究部

浅海・内水面グループ長 末吉 隆



あけまして、おめでとうございます。昨年も様々な出来事がありました。特に日本が参加表明してから5年が経過した環太平洋戦略的経済連携協定TPPが大筋合意する歴史的な出来事がありました。国内では農林水産業を営む生産者の方々はもとより、様々な産業界関係者から不安と期待の聲が上がりました。まさに転機を迎えた節目の年だったと言えます。

一方、水産研究部では養殖マグロやカボスぶりの生産進展やブリとヒラマサやクルマエビとアサリ等の複合養殖への取り組みが進みました。しかし、一方でタチウオやアサリ等の漁獲資源は低迷し、依然として水産業を取り巻く環境が厳しいことには変わりありません。

このような中、県では今後10年間の県政運営の道しるべとなる新長期総合計画を昨年10月に策定し、これを受け農林水産業振興計画である「おおいた農林水産業活力創出プラン2015」を昨年末の県議会に提出し可決されたところです。

現在、農林水産研究指導センターでは、農林水産業産出額に付加価値等を加えた「創出額」を平成25年度の2,134億円から十年後の35年度には2,250億円に拡大する目標を達成するため、第一次産業の研究分野における基本方向を定める「大分県農林水産試験研究基本指針(仮称)」の策定作業に着手し、年度末には公表できるよう議論を進めてめているところです。具体的には基本施策である「構造改革の更なる加速」「マーケットインの商品(もの)づくり」「経営マインドを持った力強い担い手の確保・育成」「元気で豊かな農山漁村の継承」を研究分野から推進するため、対象と

なる魚種等を示しながら、具体的な研究や技術開発の方向を示すこととなります。

県が策定する計画や方針は将来を描くビジョンです。漁業関係者の方々にとっては将来の大分県漁業のあるべき姿として、また、私たち研究者にとっては常にめざすべき目標としてふさわしい方針となる様に策定作業をすすめています。

漁村にも人口減少やグローバル化などの社会情勢の変化が押し寄せ、構造改革への大胆な発想が求められています。私たち水産研究部の基本的なスタンスは「ニーズ、スピード、普及」であることは、ゆるぎはありません。みなさんのご理解、ご意見、ご要望を頂きながら、今年も現場第一主義でみなさんを支援し、「もうかる水産業」をめざしていきます。そして28年がその着実な第一歩となるように努力することをお約束して、新年のご挨拶とします。

平成二十八年 元旦

ワムシ培養技術研修を受講してきました

栽培資源チーム 主任研究員 林 亨次

皆様は「ワムシ」という言葉を聞いた事がありますか？初めて聞いたと言う方、どのようなものを想像されますか？。名前にムシと付くことから想像できますとおり、小さな動物で、輪形動物門単生殖巣綱に属し、正式な名前をシオミズツボワムシ（学名*Brachionus plicatilis* sp. *Complex O. F. Muller*）という動物プランクトンです。種苗生産の現場では単に「ワムシ」と呼ばれています。大きさはおよそ0.1～0.3mm前後です。

このワムシ実はとても大事なムシなのです。どのような事かと言いますと、ワムシは種苗生産における仔魚の重要な餌（生物餌料）なのです。仔魚とは卵から産まれたばかりの魚の赤ちゃんの事ですが、自然界では仔魚の餌は海を漂う動物プランクトン等です。種苗生産においても当然仔魚に給餌せねばなりません、仔魚は配合飼料などは見向きもせず、生きた餌しか食べないので、生物餌料を与えねばなりません。その餌としてこのワムシが利用されています。

ワムシが導入される1960年代以前は、フジツボ幼生、二枚貝幼生、天然コペポダ類等が仔魚の餌として利用されていました。しかし、これらの入手には多大な労力を要し、かつ生産が不安定とのことで、新たな餌の開発が望まれていました。

このたび、平成27年11月17～19日に国立研究開発法人水産総合研究センター日本海区水産研究所宮津庁舎でワムシ培養技術研修会が開催され、受講してきました。

研修の開催目的は、「ワムシ培養に関する技術の普及と定着を図ること」として、対象者は各県の栽培センター、漁協、県試験場等の栽培担当者で、今回の参加者は北は富山県から南は沖縄県までの計9名が受講しました。

具体的な研修の一部を紹介します。

ワムシは通常の培養時には単性生殖、つまりオスがなくてもメスだけで増えていくことができます。このことにより効率良く培養をする

ことができます。ワムシのエサは市販品の濃縮淡水クロレラが利用されることが一般的です。

また、魚種によっては仔魚にとって必要な栄養（ワムシにとっては必要な栄養ではない）をワムシに取り込ませてから与える必要があります。

培養の方法は、植え継ぎ式、間引き式、連続培養法と呼ばれるものがあります。最も効率よく培養できるとされるのは連続培養法で、これは少しずつ連続的に淡水クロレラや海水を添加して、あふれ出した培養水分のワムシを収穫する方式で、安定的に高品質なワムシが生産されます。また最新の培養方法として、連続培養に閉鎖循環方式を組み込んだものがあります。これは、通常なら廃棄するワムシ収穫後の廃水を回収し、物理ろ過・生物ろ過を施し洗浄したうえで培養水として再利用する方法です。この方法により、環境への負荷を減らすとともにコスト軽減も期待されます。

また水産総合研究センターによるジーンバンク事業の紹介もありました。これは、高成長や病気に強いと言ったような特長を持った生物餌料を水産総合研究センターが、保有していて、有償で保存株の配布を行っています。

研修の最後には各県のケーススタディにより、意見交換を行いました。

水産研究部では、養殖用・放流用の新たな魚種を開発するため種苗生産試験を行っており、これまでも連続培養法でワムシ培養をしており、比較的安定して培養ができていますが、今後は、閉鎖循環方式の導入検討など、さらに効率的に、より栄養価の高いワムシを培養するよう努めていきます。



カレニア赤潮からアワビを救うために

養殖環境チーム 研究員 大竹 周作

近年、瀬戸内海を中心に有害プランクトン「カレニア・ミキモトイ」(図1)による赤潮が頻発し、今年の夏も各地で大規模な発生が養殖魚介類主体の甚大な被害をもたらしました。本種による赤潮は広域化する傾向があり、以前は赤潮の影響の無かったアワビ種苗生産施設にまで赤潮が襲来し、放流種苗が壊滅的な被害を受けることが度々報告されています。アワビ類は磯根資源を維持するため重要な放流種であり、赤潮被害軽減が喫緊の課題となっています。

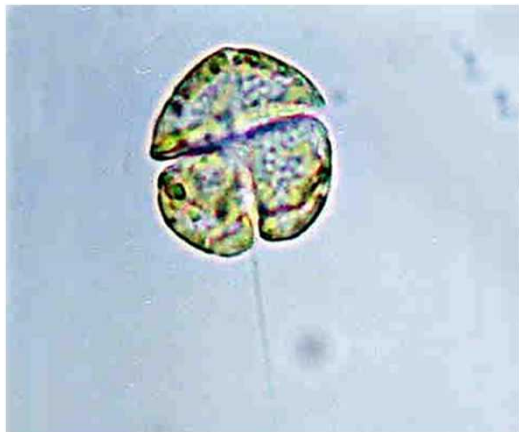


図1 カレニア・ミキモトイ

赤潮でアワビ類が致死するメカニズムとして、カレニア・ミキモトイの持つ毒物質によってアワビのエラ組織が破壊され、海水中から酸素を取り込めないことが原因と考えられています。

そこで、海水の酸素濃度を高めることによって、影響を軽減できることが期待されます。水産研究部では、現在陸上ヒラメ養殖で用いられている液体酸素を使用して、赤潮によるアワビ被害の軽減策について検討してみました。

実験に用いた赤潮海水は、佐伯湾霞ヶ浦地区地先で発生したアワビの致死密度を大きく超えるカレニア・ミキモトイ9,067 cells/mlを含む現場海水です。

クロアワビ(殻長22.54mm)を赤潮海水で満たした水槽に収容し、対照区ではエアレーション、実験区では液体酸素による酸素供給を行いました(図2)。各区から4、6、8、24時間経過後にアワビと海水を採取するとともに溶存酸素(DO)を測定しました。

アワビの状態の確認は、ピンセット刺激による貝の反応から、正常、マヒおよび死亡の3つの状態に分別し(図3)、一部を固定し、死亡個体を除くすべての個体を清浄海水に戻した後24時間以上経過するまで観察を続け最終生残率を求めました。採取した海水については、光学顕微鏡でカレニアを3回計数し細胞密度を算出しました。



図2 実験中の様子



図3 アワビの正常個体(左図)と死亡個体(右図)

実験の結果、DOは対照区で6.75～7.09 mg/L、実験区では20.31～30.57 mg/Lで推移し、実験区で常時高い値が維持されました（図4左）。カレニアの細胞密度は、実験区だけで減少しました（図4右）。

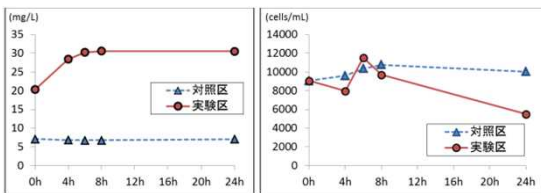


図4 実験中のDOの推移(左図)とカレニア細胞密度の推移

また、実験区のカレニアは弱っている様子が確認され、時間の経過に伴い水面や水中で集積していき24時間経過時には水槽の底に沈んでいました（図5）。



図5 水槽の底に沈み集積したカレニア

対照区のアワビは赤潮曝露時間とともにマヒ個体が増えていき、24時間ではすべての個体が死亡してしまいました。一方、実験区では正常個体が大部分を占めていました（図6）。

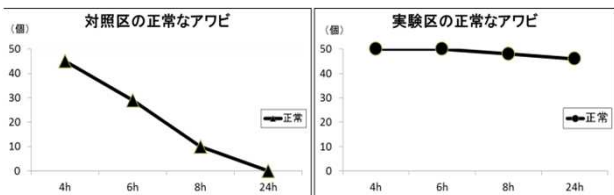


図6 赤潮曝露時の正常なアワビの個体数

赤潮曝露後に清浄海水へ戻した場合、対照区ではほぼすべてのアワビが死亡したのに対し、実験区では少なくともアワビの半数が生き残り、意外なことに赤潮に長時間曝露した貝で最も高い生残率が得られました（図7）。

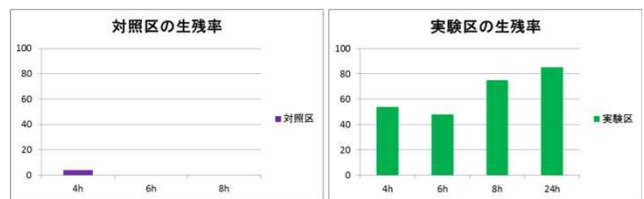


図7 清浄海水に戻した後のアワビの生残率

以上の結果から、赤潮に曝露されたアワビの死亡を液体酸素の供給によって抑制できることが明らかになりました。その要因として、赤潮曝露でエラに損傷を受け呼吸能力の低下した貝への酸素供給によって生命活動が維持されること、酸素供給によるカレニア・ミキモトイの密度低下の二つが想定されます。実験区で赤潮への曝露時間が長いものが、清浄海水収容後の生残率が高かったことは、経過時間とともにカレニアの活力が低下した実験水槽内で、酸素供給によってアワビの回復が進んだ可能性も考えられます。いずれにしても、液体酸素を用いてアワビの生残率を高められたことは、今後の対策実用化に期待がもてるものです。

今後は、アワビの鰓組織の損傷や、時間経過にともなう組織の回復等を病理組織観察で検討し、実用化に向けた方法を提案したいと思っています。

ヒジキ資源の増殖を目指して ～ヒジキ母藻の移植によってヒジキはどの範囲まで着生するか～

浅海チーム 主幹研究員 岩野 英樹

はじめに

大分県のヒジキ漁業は、周防灘の干潟域を除き、国東半島周辺、別府湾、豊後水道の各地先で行われてきましたが、近年、漁船漁業の不振、国産ヒジキ需要の高まりによる価格の高騰などの影響を受けて、採取従事者が増加し、ヒジキ漁業への依存度が高まっています。そのため、近年(平成22～26年)のヒジキの水揚げは、10年前(平成12～16年)の約2.8倍程度(230トン)に増大し、ヒジキの乱獲による資源の減少・枯渇が懸念され、ヒジキを持続的に採取できる対策や現場で出来る増殖手法の確立が必要となってきました。

現場で出来る簡易な増殖手法として、建材ブロックを用いた天然採苗が、アクア・ニュースNO.41で紹介されたとおり漁業者により豊後高田市香々地地先や国東市地先で既に実践されています。

大分県では、この様な取り組みを行う際に参考にできる様な「ヒジキ資源増殖のための手引き」を作成中で、天然採苗した建材ブロックを移植する際の適切な設置間隔についても記載の予定です。今回、その基礎資料を得るための現場調査を行いましたので、途中経過をご紹介します。

調査方法

ヒジキの母藻移植による増殖の影響範囲を確認するための現地試験を、平成27年6月16日から国東市北江海岸で開始しました。北江海岸は、ウミトラノオが優占し、ヒジキは限られた場所にわずかに繁茂する程度ですが、繁茂しているヒジキの影響を避けるために10m程度離れた場所に試験区を設置しました(図1)。試験区では、同心円の中心から8方向の放射状に、1m間隔に目印を付けたガイドロープを敷設し、目印の場所に金属杭を用いて着生基質となる建材ブロッ

クを1個ずつ固定しました。同心円の中心にはヒジキ幼胚の供給源として母藻の付いた現地自然石を8個配置し、この現地自然石に隣接させて中心から0.5mの位置にも、7個の建材ブロックを追加して(図2)、ブロックへのヒジキ幼胚の着生状況を定期的に観察しました。

途中経過

試験開始時に、現地自然石から抜き取って調べたヒジキ主枝の性比は1:1で、主枝の全長は $105 \pm 15 \text{cm}$ ($N=8$)でした。放卵は、生殖器床の観察結果から主に6月下旬頃から7月上旬頃を中心に行われたものと思われ、自然石のヒジキ主枝は、干出時にはライン①とライン⑧の間の方向に伸びて広がる傾向が見え、8月30日には、全て流失して繊維状根由来の新芽に交代していました。また、試験中にはブロックへの泥の堆積、泥の懸濁による海水の濁りでブロックが良く確認出来ない状況、波浪の影響で試験区への小石の集積などが確認されています。

ブロックを横から注意して観察すると、ヒジキの新芽が7月3日には確認でき、7月31日には、ブロックの上からでも確認できる程度まで生長していました。7月31日と10月28日にブロックへの着生個数を計数した結果、母藻から5m離れたブロックにも着生は見られましたが、着生数は少なく、10個/ブロック以上の着生がみられたのは、7月31日が母藻から2m、10月28日が母藻から1mの狭い範囲に限られていました(図3、4)。

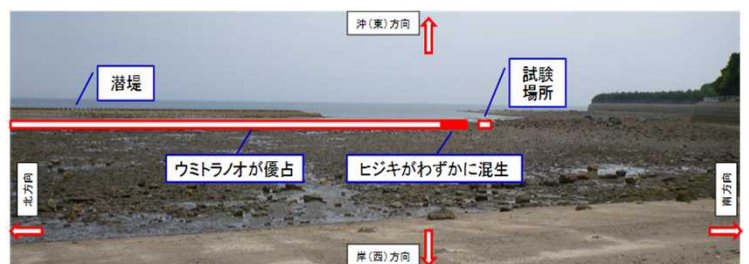


図1 国東市北江海岸における試験場所

また、ガイドロープとして敷設しておいた直径4.5mmのロープにもヒジキが着生しており、ロープ、ブロックともライン①の方向に向けて着生数が多い傾向にありました(図3、4、5)。母藻移植による効果の影響範囲を現地で調べた既往の知見¹⁾では、ヒジキ帯の広がり、母藻設置地点を中心にほぼ円斑状に広がり、下方へ0.5~1.0m、上方へ2~4mとあり、今回は、これより影響範囲が狭い結果になっています。また、ヒジキの幼胚は、「放卵翌日の昼の上げ潮時に母藻から離れて波に運ばれ、波が引いた後、岩などの基質に直ぐに付着する」と着生機構を類推した報告²⁾があります。ライン①は、上げ潮時に波が寄せる岸側の上方に当たり、ライン①の方向に向けて着生数が多い傾向にあった今回の結果は、このような着生機構が関係していることが考えられます。

今後は、この試験区の中でヒジキの繁茂がどのように広がっていくのか、また、2年目の幼胚の着生状況を調べ、今年の結果と比較してみたいと考えています。また試験を行った北江海岸は、ヒジキの繁茂は少なく、競合種のウミトラノオが優占する場所で、試験中にも泥の堆積や海水の濁りが見られ、ヒジキの増殖に適した条件の場所ではないと思われたので、ヒジキの漁

場となっている別の場所でも同様の試験を行い両方の結果を比較してみる必要があると考えています。

こうした調査結果をまとめて、現場で役立つ「手引き」を作成する予定にしています。

参考資料

- 1) 西川博, 小川英雄. ヒジキの移植効果について. 水産増殖1977; 24(4): 123-127.
- 2) 須藤俊造. ヒジキの卵・精子の放出及び幼胚の離脱と着生について(海藻の孢子付けの研究第11報). 日本水産学会誌1951; 17(1): 9-12.

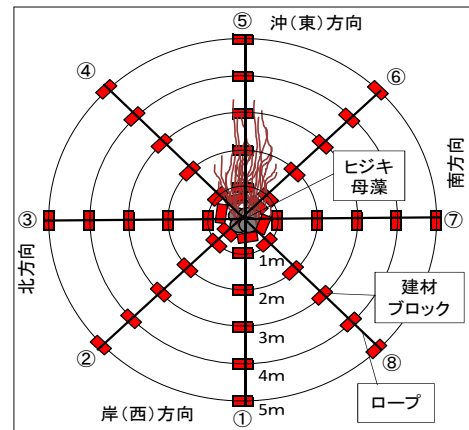


図2 試験区におけるブロックの設置状況

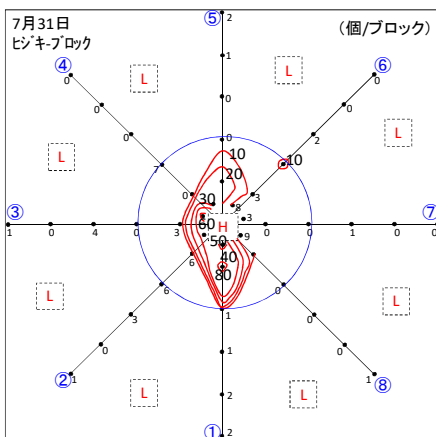


図3 ヒジキの着生状況
(7月31日ブロック)

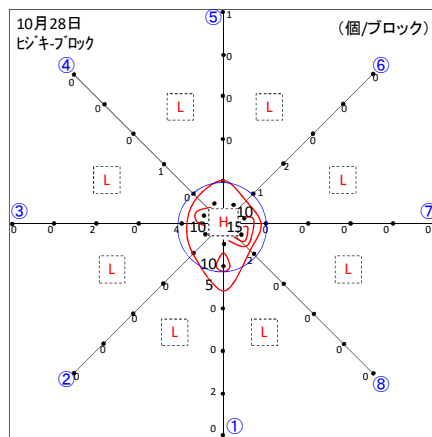


図4 ヒジキの着生状況
(10月28日ブロック)

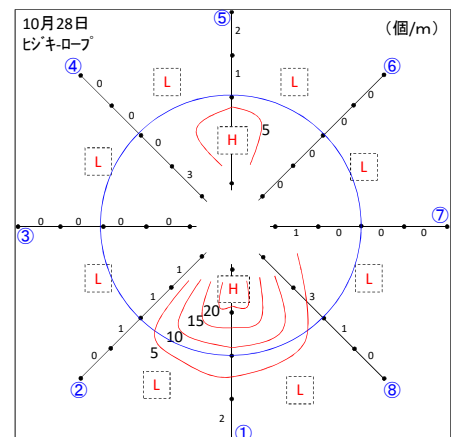


図5 ヒジキの着生状況
(10月28日ロープ)

かぼすドジョウ誕生間近！

内水面チーム 主幹研究員(TL) 樋下雄一

県内の認知度を上げようと、安心院フェア葡萄酒まつり、水産振興祭、宇佐グルメフェスタ等で“宇佐どじょう”の唐揚げが試食・販売され、積極的にPRされています。

お陰様で、一昔前に比べると、お客様からは「柔らかくて美味しい」「くさみがない」と大好評。リピーターのお客様も増え、数時間で完売するなど、確実に宇佐ドジョウのファンが増えていることを実感しています。それでも、たまに「泥くさい」「ドジョウうぁー」というお客様も。泥を使わない無泥養殖であるにもかかわらず、泥くさいと言われるのは心外です。

本年度から、さらにドジョウのイメージをアップし、「ドジョウを食べたい」と思ってもらえるようにと、【かぼすドジョウ】の創出を目指す飼育試験を実施したので、その結果をご報告いたします。

“おんせん県おおいた”の温泉で育っているドジョウに、さらに、大分をイメージする“かぼす資材”を添加した飼料を給餌し、ドジョウを90日間飼育しました。すると、飼育したドジョウの筋肉部分から、かぼすの香り成分であるリモネンが0.01mg/100g検出（かぼすブリの場合は0.3~0.49mg/100g）されました。

残念ながら飼育試験は20尾で実施したので、成分分析に提出する検体で精一杯。まだ、試食はしていません。でも、この検出結果で来年度の飼育試験に弾みがつきます。

来年度は、給餌日数の短縮や添加濃度を下げることによるコスト削減を目指して頑張りたいと思います。

さらに大量飼育にも取り組んで、是非、生産者の皆様にも、かぼすドジョウの食味試験に参加してもらいたいと思っています。



一生懸命かぼす添加飼料を食べている試験ドジョウ



国東半島のカキ養殖に注目！！－「くにさきOYSTER」初出荷式－

東部振興局 農山漁村振興部 東馬場 大

【初出荷式】

業界紙や新聞、テレビでも報道されましたので、すでにご存じの方も多いかと思いますが、平成27年12月2日、ヤンマーマリンファームが国東市や県漁協各支店と共同開発した生食用殻付きカキ「くにさきOYSTER」の初出荷式が行われました。



初出荷式の様子

【取り組みの経緯】

国東半島では様々な漁船漁業が営まれていますが、漁獲量の減少や魚価の低迷などにより、漁家経営は厳しい状況が続いています。

このような状況を打破し、地域漁業を活性化



国東半島沖での垂下養殖

させるため、平成25年度から国東市、東部振興局の指導のもと、市内の一部の漁業者がヤンマーマリンファームの協力を得てマガキの試験養殖を行ってきました。試験を重ねること2年、成果も見えてきた27年9月には区画漁業権が免許されました。こうして国東半島でカキ養殖に着手することができ、今回の出荷式を迎えることができました。

【くにさきOYSTERの生産手法】

一般的なカキ養殖は沖合いで養殖し、1年半ほどかけて生産しますが、「くにさきOYSTER」は自然豊かな国東半島の干潟と沖合い漁場を利用し、約1年で生産できます。干潟と聞いて？？と思う方もいらっしゃると思いますが、干潮時の岸壁にびっしりと付着しているカキを思い出してください。本来、カキは潮間帯に分布する二枚貝なのですが、沖合で養殖することにより24時間餌を食べることができ、殻の成長や身入りが促進されるため、一般的なカキ養殖は沖合で行われています。

今回の取組では、カキ本来の生育環境である潮間帯（干潟）での育成と、殻や身入りの成長促進効果の高い沖合での養殖を組み合わせることにより、短期間で極めて高品質なカキが生産されています。



干潟でのプラスチックバック養殖

【くにさきOYSTERの展望】

「くにさきOYSTER」は深みのある殻や肉厚な身、雑味のないクリアな旨味が特徴で、1年目の今季（12～4月）は60万個を目標に首都圏のオイスターバーや百貨店などに出荷されるほか、香港やマカオへの輸出も計画されています。また、地元国東市内でも数店舗で食べることが出来ます（3日前まで要予約）。生食用として提供するため、2週間毎に養殖場の海水検査、出荷時には出荷ロット毎に検査を行い、厳格な出荷基準を設けています。

漁船漁業が低迷する昨今、今回の生産手法では操業の合間にカキ養殖を行うことができるため、漁業者の所得向上にもつながることが期待されます。

また、この「くにさきOYSTER」のほかにも、カキ養殖を始めた方もおり、国東半島でのカキ養殖が盛んになりつつあります。

今後新たなブランドとして国東のカキ養殖にご注目ください。



「くにさきオイスター」の外観



深みのある殻や肉厚な身が特徴的な
「くにさきオイスター」

お見合い大作戦 in かまえ

南部振興局 農山漁村振興部 中里 礼大

【晩婚化の進行】

現在、日本を含め世界中の7割以上の国で晩婚化が進んでいるという報告があります。2010年の総務省国勢調査によると、男性30～34歳の未婚率は1960年には9.9%であったのに対し、2010年では47.3%と半数近くが未婚者となっています(図1)。理由としては、収入格差の拡大、女性の社会進出、独身主義者の増加、自由恋愛の浸透など様々なことが考えられています。

【水産業界でも晩婚化】

漁業者は夜間や土日も仕事の場合が多く女性と知り合う機会が少ないことから、未婚率は非常に高い業種となっているのが現状です。

【水産業界の明るい未来のために】

水産業界は、漁業就業者の高齢化や漁業資源の減少、魚価低迷など厳しい環境下にあります。今後の水産業界を維持・発展させるためには、新たな漁業後継者の確保が重要であると考えられます。そこで、南部漁業青年協議会(佐伯市内8支店の青年部長により構成)では次代に続く後継者不足の解決策として、普段女性と知り合う機会の少ない未婚漁業者に出会いの場を提供することが重要と考え、2年前より佐伯市内の未婚漁業者と女性の交流を図るイベントを開催しています。

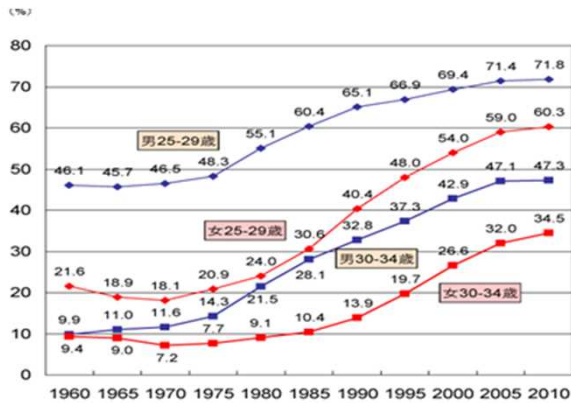


図1. 年齢別未婚率の推移

【今年の活動内容の紹介】

10月10日(土)に男性10名、女性8名の計18名でパーティーを行いました。内容は3部構成とし、1部では釣っちゃ王での男女釣り体験(写真1)、2部では釣った魚で豪華BBQ(写真2)、そして3部のカップリングパーティーといった計8時間の大型企画となりました。

これまでになく規模が大きいことから、協議会で綿密に打ち合わせをしておりましたが、計画通りにはいかないのが現実です。

1部の釣っちゃ王では、晴天に恵まれたものの肝心の釣果が伸びず、2時間の釣り時間のうち1時間が経過した時の釣果はマダイが2尾だけでした。最初は糸を垂らすだけでも楽しい時間を過ごしていた参加者も、さすがに1時間たっても釣れないとなると潮風と波の音だけがこだまする時間へと様変わりしました。これではまずいと、司会の私以外スタッフ総出で生け簀に向かって糸を垂らしました。終盤は釣っちゃ王スタッフの方にも釣りに参加してもらい、ヒラマサ、シマアジ、マダイを計10数尾釣ることが出来、青年部員一同胸をなでおろしました。



写真1. 釣り体験の様子

2部のBBQでは釣っちゃ王で釣った豪華な魚を、青年部員がさばき刺身やカルパッチョなど各種料理で参加者をおもてなしました。今回はお酒を解禁したことで盛り上がりすぎた一幕もありましたが、非常に楽しいBBQとなりました。

そしてお待ちかねのカップリングパーティーでは、それまでの活動で男女の交流が深まっていたため過去最高の盛り上がりでした。3分間のくるくるトークでは、時間が過ぎても席を離れない人が続出し、運営する青年部員は四苦八苦していましたが、参加者は楽しんでいるようでした。

そして結果発表タイムです。私達の祈りが通じたのか、なんと2組のカップルが誕生しました！青年部員の苦勞が報われた瞬間でした。今後さらなる吉報が来ることを楽しみに待っています。

【これから】

2年前からカップリングパーティーの取組を開始していますが、年々成果が出てきています。カップル成立数の増加もそうですが、一番の成果は協議会主催のパーティーに参加したことをきっかけとして、民間企業が主催のパーティーにも参加するようになったという独身漁業者が少なくないことです。

今年の10月から県が婚活事業「OITAえんむす部（部長：お笑いコンビダイノジの大地洋輔さん）」をスタートさせ、婚活事業の取組を支援していますし、婚活の取組は今非常に盛り上がっています（<https://oita-enmusubu.com/>）。私も結婚するまで数え切れないほどのパーティーなどに参加し、運良く結婚することができました。今後も私の拙い経験も踏まえながら、多くの独身漁業者の出会い支援の取組を行っていきたいと思います。



写真2 青年部員による調理例

人権コーナー

差別は引き継がない

2007年頃に宮崎県内の大学生が書いた体験談を紹介します。

――

私の姉は婚約者の母親から出身地を聞かれました。その後、姉が部落出身だという理由で母親や親戚から反対された婚約者は結婚の意思をなくし、姉たちの交際は終わりました。

私は、交際して2年になる彼氏に自分が部落出身であることを告白する決意をしました。言ってしまったら、姉のように2人の関係が壊れるかもしれないと思うと、悲しみのあまり涙が出てきました。私は泣きながらゆっくりと話しました。彼は黙って私の話を聞き、私が話し終わると「話してくれてありがとう。でも本当は知ってたんだよ。」と言いました。

2人の交際が始まった頃、彼の両親は「これから彼女と付き合いしていく中で、彼女の住んでいる土地が被差別部落だということを知り、そのせいで別れたりするような心の狭い、差別意識を持った人間にだけは育てて欲しくない。」と思い、彼に話したのだそうです。私はそれを聞いて、今度は嬉しくて涙があふれました。彼の両親に本当に感謝しました。

差別は繰り返されます。親から子へ受け継がれてしまうのです。だからこそ、私も将来、自分の子どもが生まれたら、しっかりと教育したいと思います。もっともっと人権・部落問題についてきちんと教育を受けた人たちが増えれば、部落問題はなくせると思います。

―― (第36回大分県人権教育研究大会資料から抜粋)

涙を流すほどの勇気が必要だった彼女の気持ち、それをきちんと受け止めた彼の常識。

子どもたちに、差別が残った社会を引き継ぐのか、それとも、差別のない社会にして渡すのか・・・私たちは選べます。あなたは、どちらを選びますか？

* 詳しくは大分県ホームページ [こころちゃんのへや](http://www.pref.oita.jp/site/kokoro/)(<http://www.pref.oita.jp/site/kokoro/>)から
ごらんください



編 集

大分県農林水産研究指導センター水産研究部

発行者・連絡先

大分県農林水産研究指導センター水産研究部

ホームページアドレス <http://www.pref.oita.jp/soshiki/15090/>

水産研究部
管理担当、企画指導担当
栽培資源チーム、養殖環境チーム

佐伯市上浦大字津井浦194-6 (〒879-2602)
Tel 0972-32-2155 Fax 0972-32-2156
E-mail a15090@pref.oita.lg.jp

水産研究部 浅海・内水面グループ
管理担当、浅海チーム

豊後高田市呉崎3386 (〒879-0608)
Tel 0978-22-2405 Fax 0978-24-3061
E-mail a15091@pref.oita.lg.jp

水産研究部 浅海・内水面グループ
内水面チーム

宇佐市安心院町荘42 (〒872-0504)
Tel 0978-44-0329 Fax 0978-34-4050
E-mail a15091@pref.oita.lg.jp